

きずな



2016年 8月25日

NO 1085

赤旗井原出張所

井原市井原町103 (Tel. 62-6200)

毎年開催されている「市民の声を聴く会」が、今年も8月2日の美星地区を皮切りに、市内13地区（最後は8月25日の高屋地区）で順次開催されました。20人の議員が1班から4班まで各5人で3～4地区を担当して進められました。筆者の森本議員は1班に所属しており、木之子、出部、青野に出席しました。会の様子は森本議員が所属する1班の様子しかわかりませんので、1班での様子をお知らせします。

今年、初めての試みとして参加者全員が意見や考えが出せるように「ワークショップ」形式で行い、人口減少問題について様々な意見や提案が出されていました。13地区全体のまとめは後日議員全員で協議し、開催地区に報告することになっています。



木之子地区 18日

18日午後7時30分より木之子公民館で「市民の声を聴く会」が開催されました。我々1班（上野、大滝、惣台、西村、森本）担当での今年度最初の「市民の声を聴く会」です。11人の参加でした。議会側の報告のあと、報告に対する質問のあと、今回初めてのやり方として、参加者全員から意見等を出してもらおうという考えから「人口減少」について「ワークショップ」方式で行いました。

それぞれ参加者が何らかの形で意見等を出し合うという所期の目的は達成されたのではないのでしょうか。時間オーバーして9時20分頃に散会しました。写真はワークショップの作業中の様子。

出部地区 19日

19日午後7時より出部公民館で「市民の声を聴く会」が開催されました。きのうの木之子地区に続く2カ所目の「市民の声を聴く会」です。12人の参加でした。

議会側の議会関係の報告のあと、報告に対する質問のあと、木之子地区と同じように「ワークショップ」方式で行いました。

この地区でもそれぞれ参加者が何らかの形で意見等を出し合うという所期の目的は達成されたのではないのでしょうか。

時間オーバーして9時前に散会しました。写真は会の最初にあいさつする藤代公民館長（こちら向きで立っている左側）。



青野地区 18日

20日午後7時よりJA岡山西井原北支店青野店舗2階で「市民の声を聴く会」が開催されました。

我々1班担当で最後3カ所目の「市民の声を聴く会」です。28人の参加でした。議会側の議会関係の報告のあと、報告に対する質問を出していただき数点の質問が出ました。

そのあと、「ワークショップ」方式で参加者が何らかの形で意見等を出し合うという所期の目的はこの地区でも達成されたのではないのでしょうか。

ブドウ作りの盛んな青野地区独自の意見も出されていたようです。ここも時間オーバーして9時までかかりました。写真はワークショップの内容について説明する上野班長（議長）一番奥。



リオ五輪閉幕

発揮されたアスリートの信念

連日の熱戦が続いた、南米大陸初めてのリオデジャネイロ・オリンピックが無事に閉幕しました。

人間の可能性開く姿感動

これまでで最多となる41個のメダルを獲得した日本選手の活躍は見事でした。絶妙なバトンタッチで銀メダルに輝いた男子400メートルリレー、最後まであきらめず大逆転劇で勝利をつかんだ女子のバドミントンやレスリング、男女の卓球、ベテランとホープとのチーム力を発揮した体操や競泳、柔道など、多くの人たちに熱く深い感動を呼びました。

オリンピックの女子で初めて4連覇という偉業を成し遂げた女子レスリングの伊調馨選手は、その道のりを、自著でこう述べています。「自分を改良していくのは楽しい。無限にある。自分を変えていくこと自体を楽しんでいる」。(『一日一日、強くなる』)

世界の競技者からも力強いメッセージをもらった大会でした。“超人”ウサイン・ボルト選手(ジャマイカ)は、「私はいつも挑戦してきた。立ち向かい、なすべきことをして人びとを誘発し、元気を与えられてうれしい」と、人間の可能性を切り開くアスリートの信念を語っています。

陸上競技女子5000メートル予選では、転倒した米国とニュージーランドの2選手が助け合い、励まし合ってゴールする場面がありました。勝敗にこだわる風潮が強いなかで、ライバルをリスペクト(尊敬)する光景は胸を打つものがあり、スポーツが人間的な営みであることを示してくれました。

こうしたアスリートの信念と精神の発露は、オリンピックのモットーである「大事なことは勝つことではなく、いかに参加したかにある」を想起させ、ドーピング(禁止薬物使用)など不正行為に走るメダル至上主義を乗り越える大切さを提起したと言えるでしょう。

ドーピング排除のたたかいが、リオ五輪から本格化し、前進的な動きになっています。まだ、選手の救済措置や競技ごとの判定の順守と徹底は今後の課題に残っているだけに、この大会を機に選手の生命と人権を守り、スポーツの世界から不正行為をなくしていくために毅然と立ち向かっていくことを重ねて期待します。

国際オリンピック委員会(IOC)が難民選手10人を救済する参加措置を講じたことは、一つの試みとして注目されました。選手たちが「次は母国の選手として出場したい」と願っているように、スポーツでの工夫と努力が貧困と飢餓、民族同士の対立や政情不安という根本問題を打開していくことに結びつくよう希望するばかりです。

新興国などへの励ましに

経済的困難や治安問題を抱えながらも、南米初の勇気ある試みとしてのリオ五輪が中南米やアフリカ、中央アジアなど新興の国々を励ましたことは、メダル獲得国・地域が過去最多の87にのぼったことにも反映しています。南太平洋の小さな島国フィジー共和国は新採用の7人制ラグビーで優勝し、これを祝って「国民の祝日」になったのもうれしいニュースです。

リオデジャネイロでは引き続き9月7日からパラリンピックが始まります。この大会も平和と友好の舞台となり、世界の競技者が障害を超えて新たな可能性を開く主人公となって躍動してほしいと思います。

8月23日付しんぶん赤旗日刊紙「主張」より

この「きすな」は森本ふみお議員のブログ (<http://m.okajcp.com>) でも見れます

生活に役立ち勇気と確信のわくしんぶん[赤旗]をお読みください(月額日刊紙3,497円日曜版823円)

